研究ノート 2

椎葉村を訪ねて

——地理と歴史の旅(2)——

矢野弥生

四　二十年間で人口半減の村

世帯数も約四分の一に減少

椎葉村の人口一人当たりの生産所得は一一四万七千円（昭和五二年度）という低額である。また、村民所得の四五％は林業所得で、兼業農家が多い。

椎葉村も他の山村地域と同じように典型的な過疎地域である。過疎法でいう過疎地域とは、第一に五年ごとに実施される国調で人口が一〇％以上減少していること、第二に財政力指数（基準財政需要額に占める基準財政収入額の割合）が〇・四％以下の市町村である。村役場に聞くと、昭和五五年では椎葉村の財政力指数〇・一七ということで、極端に低いことがわかる。

村の人口推移（表7）をみると、昭和三五年には一〇、八七九人で最高を記録し、それ以後は確実に人口の減少をみせており、昭和五五年には五、四七八人となり、人口が二分の一に激減している。また、この二〇年間に人口が半減しているだけでなく、世帯数も約四分の一に減少している。

最近における人口減少率をみると、昭和四〇年から四五年までの五年間に一四％、同四五年から五〇年までに一七・七％、同五〇年から五五年までに一二・六％と減少し、いずれも一〇％を越える高率の減少率を示していることがわかる。

宮崎県内における人口減少率（昭和四五—五〇）をみると、減少率の著しい地域は県北部の東臼杵郡で、とくに椎葉村一七

・七％、諸塚村一五・五％、北郷村一六・四％と児湯郡の西米良村二三・三％、西臼杵郡の日之影町一五・一％などで、いずれも山村的性格の強い九州山地の村である。

山村の人口が大きく減少したのは、昭和三五年ごろから日本の産業構造の変化、高度成長に伴い労働力不足から、山村の人々が都市の工業地帯に流出したことも大きいが、さらに直接的な理由としてはエネルギー革命（木炭・石炭から石油へ）がある。山村地域では一般に木炭製造をして生計を立てている人々は山林所有者でない階層（所有していても少ない）であり、木炭の需要が減少すると、村外へ流出していったのである。残った村民は大部分が山林所有者で、これらの人々は山林の経営を中心に村の振興をはかる努力をしている。

人口減は教育にも大きい影響

椎葉村は全国的にみても、有数の面積を有する広大な村であり、一平方キロ当たりの人口密度は一〇・二人という過疎地域である。

その面積は大分県の町村の中で最大の面積を有する玖珠町（二七八平方キロ）の約二倍に近い面積だから、その規模の大きさがわかる。過疎化の進行は村民の生活のあらゆる面に深刻な影響を

表7　椎葉村の人口推移

単位：世帯・人

年次	世帯数	人口 総数	人口 男	人口 女	一世帯当り人員	人口密度（1km）
※ 大正9年	1,823	9,495	5,154	4,341	5.2	17.7
※ 14	1,775	8,954	—	—	5.0	16.7
※ 昭和5年	1,627	8,795	4,504	4,291	5.4	16.4
※ 10	1,873	10,165	5,307	4,858	5.4	18.9
※ 15	—	11,463	6,190	5,273	—	21.3
※ 25	1,677	9,310	4,590	4,714	5.6	17.3
※ 30	1,956	10,683	5,596	5,087	5.5	19.9
※ 35	2,091	10,879	5,789	5,090	5.2	20.2
※ 40	1,907	8,854	4,461	4,393	4.6	16.5
※ 45	1,803	7,616	3,783	3,783	4.2	14.2
※ 50	1,636	6,267	3,080	3,187	3.8	11.7
54	1,566	5,574	2,761	2,813	3.6	10.4
※ 55	1,588	5,478	2,774	2,734	3.4	10.2

（資料……※国勢調査～現住人口調査）

表8　椎葉村の教育

(1) 小　学　校

単位：人

年　次	学　数		学級数	児　童　数			教員数(本務者)	職員数(本務者)
	本　校	分　校		総　数	男	女		
昭和53年	10	1	46	594	298	296	72	25
54	10	1	44	587	307	280	71	26
55	10	1	43	564	299	265	69	27

(資料……学校基本調査)

(2) 中　学　校

単位：人

年　次	学校数	学級数	生　徒　数			教員数(本務者)	職員数(本務者)
			総　数	男	女		
昭和53年	2	11	335	165	170	26	9
54	2	10	282	146	136	25	9
55	2	10	284	147	137	26	9

(資料……学校基本調査)

(3) 中学校卒業後の進学就職状況

年　次	総　者			進学者			就職者			就職進学者			その他			自家自営(再掲)			進学率	就職率
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女		
昭和53年	132	63	69	97	49	48	18	3	15	16	1	5	9	9	0	1	1	0	73.5	16.6
54	129	58	71	100	39	61	9	7	2	16	10	6	4	2	2	0	0	0	77.5	19.3
55	88	44	44	79	42	37	4	1	3	5	1	4	0	0	0	0	0	0	89.8	14.8

(資料……学校基本調査㊟進学率・就職率とも就職進学者を含む)

(4) 椎葉中学校寄宿生徒

単位：人

区　分	昭和53年	昭和54年	昭和55年
男	75	73	79
女	78	65	68
計	153	138	147

(資料……教育委員会　毎年5月1日現在)

与えており、たとえば、防災、教育、保健などの地域社会の基礎条件の維持が困難になってきている。表8の資料を見ても明らかなように、小中学校は分校一を含めて一三校もありこの広い村に中学校は松尾中学校と椎葉中学校の二校しかない。したがって椎葉中学校では、国庫補助や村の補助があるにしても、ほとんどの生徒は寄宿舎（昭和五五年一四七人）生活を余儀なくさせられているのである。また、高校進学でも他地域より低く、昭和五三年には七三・五％、五四年に七七・五％、五五年には八九・八％となっている。それは本地域に高校の分校もなく、市部に出なければならぬということで、経済的負担が大きいことが主因であることは容易に推測できる。

医療関係についてみると、最近はかなり改善されてきているが、村の中心集落の上椎葉には役場の近くに唯一の国保病院があるが、宮崎市の約二倍の広さの村としては少なく、依然として不便は改善されていない。この病院では、医師三人（うち一名は定住で、台湾からみえた歯科医）で、二名の医師は宮崎医科大から一年交代で出張してきているという。宮崎医科大では「辺地こそ、医の原点を学ぶところ」と、昭和五五年から、基礎学習を終えた医学生を、山間僻地で治療を続ける医師のもとで体験学習させるという。しかし、辺地に真実の医療の原点を求めるなら、経験のない医学生だけでなく、経験の豊富なベテラン医師も共に派遣すべきではないかと思う。

多い林業関係の出かせぎ

椎葉村が昭和五六年八月（民生委員による調査）に実施した、村の出かせぎの実態調査（表9）によると、出稼総数三八人で、出かせぎ者の職業は農林業が多い。出かせぎの経路や理由をみると、出かせぎ者三八人のうち、一人を除き、親戚・知人の紹介で出かせぎに出ており、職業安定所を通したものは一名で、縁故によるものが圧倒的に多い。出かせぎの動機・理由としては生活費の補充が多いが、子供の教育資金を得るためというものが二人あることは、僻地の恵まれない環境に起因するものと思われる。

出かせぎ先では、阪神が三一名で圧倒的に多く、そのほとんどが林業関係の仕事であるという。役場の総務課の話によると

表9　椎葉村の出かせぎの実態調査（昭和56年8月）

(1)　出かせぎ総数　（人）

男	38
女	0
計	38

(2)　出かせぎ者の主な職業

イ、農　業	23
ロ、林　業	6
ハ、商　業	2
ニ、日かせぎ　無職	7
ホ、そ の 他	

(3)　出かせぎの経路

イ、職業安定所を通じて行った	1人
ロ、親戚・知人の紹介で行った	37
ハ、会社の募集に応じた	0
ニ、その他の方法で行った	0

(4)　出かせぎに行っ理由

イ、生活費の補充	35人
ロ、借金返済のため	0
ハ、経営資金を得るため	0
ニ、子供の教育資金を得るため	2
ホ、人手があまっているから	0
ヘ、家族との折り会いが悪いため	0
ト、その他	1

(5)　出かせぎに行っているところ

イ、京浜(東京・横浜)方面	4人
ロ、中京(名古屋)方面	0
ハ、阪神(大阪・神戸)方面	31
ニ、中国(広島)方面	0
ホ、北九州方面	1人
ヘ、県内(居住地以外の市町村)	2
ト、その他	0

(6)　出かせぎ先の仕事の内容

イ、土木・建築関係	3人
ロ、鉱業関係	2
ハ、電気・ガス・水道関係	0
ニ、商業関係	0
ホ、運輸通信関係	0
ヘ、水産・畜産・農業・林業関係	30
ト、その他	3

(7)　出かせぎ者の年令

イ、20歳未満	1人
ロ、20歳～29歳	7
ハ、30歳～39歳	5
ニ、40歳～49歳	15
ホ、50歳～59歳	9
ヘ、60歳以上	1

(8)　出かせぎしている期間

イ、1か月以上3か月未満	14人
ロ、3か月以上6か月未満	7
ハ、6か月以上	8
ニ、1年以上2年未満	2
ホ、2年以上	7

（資料……「椎葉村の出かせぎの実態報告」による）

阪神方面といっても、大阪や神戸ではなく、滋賀県への林業出かせぎが圧倒的に多いらしい。現地の山林労働で、主な仕事は造林、下刈り、枝うち、間伐、山おとしなどであり、椎葉の人々の山仕事の経験がものをいう適した職業の一つであろう。滋賀県では、さらに冬季には雪害が多く、杉が雪のため倒れるのをおこす仕事も多いという。また、一部の出かせぎ者は和歌山県の奥地で林業労働に従事しているということである。

出かせぎ者の年齢別構成では、四〇―四九歳が一五人で最も多く、五〇～五九歳が九人となっており、四〇歳以上の壮年層が全体の六三％を占めている。出かせぎ期間では、一年以上の長期間にわたるものは少なく、季節的出かせぎが主体である。

過疎地域の椎葉村は村全体で三八人しかないということは意外に少ないという印象をうけるが、これは昭和三五年から現在までの二〇年間に人口が半減し、世帯数も四分の一に減少しているという事実から考えても、挙家離村も含めてこの期間に山林所有者を除いてほとんど流出してしまったということであろう。すなわち、椎葉で生活できな階層に層する山林をもたない（所有していても少ない）人々は離村をしていったのである。

五　渓谷とダムの椎葉

耳川水系の電源開発

村内の中心部を流れる耳川と支流は深い壮年期のV字谷を流れ、各所に、すばらしい息をのむ渓谷美を眺めることができる椎葉は市房県立自然公園（昭和四一年指定）に属した山岳公園の中に入る。集落は谷底に近いところは急傾斜なので少なく、山地の中腹や山頂付近が傾斜がゆるやかであるので、そこに点在している。古い耕地や道路も山頂付近に多くみられる。

戦後、山林・山地は二つの面で注目された。一つは電源開発、二つには戦時中の過伐による山地の荒廃と国土保全の必要であった。そして山地交通の近代化、水没による離村・廃村が進められ、薪炭の増産は過伐に拍車をかけ、植林の必要性が強調された。

昭和三十年代の高度経済成長期をむかえ、薪炭生産の減少と植林により、漸次山地の緑は回復したが、人口の流出が著しくなり、いわゆる過疎から廃村へと進んだ村も多い。

九州山地のど真ん中にある秘境といわれた椎葉も戦後大きく変貌した。先ず、この村を大きく変貌させるうえで、大きな影響を与えたのは、耳川水系に進められた電源開発であった。河川の延長一二〇キロ、流域面積九〇〇平方キロ、多い雨量と勾配、蛇行する峡谷などの有利な諸条件を備えた耳川は、水力資源に恵まれた宮崎県の中でも、とくに優位を占める河川という。

その電源開発の歴史をみると、昭和四年、中流三〇キロの地点に西郷発電所が建設されて以来、昭和七年山須原発電所、昭和一三年塚原発電所、昭和一七年岩屋発電所（椎葉村）と昭和三〇年五月には、その最上流椎葉に上椎葉発電所、その後、昭和三一年に最下流に大内原発電所、昭和三六年に諸塚発電所が開発され、流域の総出力は二八、七〇〇キロワットに達している（「上椎葉」九州電力）。

昭和初期、やっと県道完成

椎葉の開発がおくれたのは、地形が険しいため、道路建設が容易でなく、昔ながらの尾根伝いの道では、山林の開発や生活物資の運搬も十分できなかったことが主因である。川沿いに近代的道路ができたのは、宮崎県が昭和七年頃、当時の金高で約一〇〇万円かけて日向市の富高（日向市の中心地区）から上椎葉まで県道を建設したことによるという（「地理」五巻の六号）

この道路の建設で、それまで肥後的であった椎葉が日向的になったといわれる。この道路ができる以前は耳川を筏師が定期的に上下する程度で、ときどき、富高の町にでてきた椎葉の住人は「那須どん」と呼ばれていた。

また、上椎葉では、現在でも熊本県との物資の交流があり、とくに食料品や魚の仕入れ先には、隣接する熊本県中西部の蘇陽町や矢部町などからも多いという。

ダム建設の犠牲者と水没した七八戸

椎葉村の開発は道路建設とダム建設によって始まったといえるようである。とくに国道の建設や架橋・ダム建設により静か

だった山里は熱病にかかったような状態になり、とくにダムによる水没補償を含んで、ダム景気にわいた村が、再び以前のような静かさに戻るには時間がかかったという。

上椎葉の中心から少しはずれたところにある「鶴富屋敷」から山腹の遊歩道を約三〇分ぐらい行くと、上椎葉ダムの上に出た。高さ一一〇米・長さ三四〇米の、日本最初のアーチ式ダムを見おろす展望台のある「女神の像公園」に行ってみた。人影は全くなく、眼下には、新平家物語の著者・吉川英治氏によって「日向椎葉湖」と名づけられたダムは静まりかえっていた。

公園の一隅には富永朝堂氏作「三女神」慰霊像があった。まれにみる難工事のため、一〇五人の犠牲者をとむろうための像で、慰霊台には大きく「慈光」の字が書かれてある。大きなダム工事にはかならず多くの犠牲者がでている。

また、上椎葉ダムの建設にともない、二小学校と七八戸が水没し、移住を余儀なくしている。現地での話によると、水没七八戸は村内に残留したものは一戸もなく、隣接の熊本県へ移転したという。

上椎葉ダムと日向椎葉湖

このような水没移住者がでた歴史的・社会的背景を考えてみたい。わが国において大規模なダムが本格的に建設されるようになったのは、戦後の朝鮮動乱を契機とした電力需要によるものであった。戦前のダムの主体は小規模な農業専用ダムであるさらに発電の形態の多くは水路式のものであった。

したがって多くの水没移住者を余儀なくさせたのは、戦後の相次ぐ貯水式巨大ダムの建設によるものであり、それは「TVA」を模範として昭和二五年に制定された国土総合開発によるものであり、同二七年に制定された電源開発促進法はさらに拍車をかけた。その後、発電の主体は火力へ移行したこと、また伊勢湾台風による洪水災害を契機として洪水調節を主な目的と

し、発電を従の目的とした多目的ダムの建設が主体となり、発電専用のダムは減少した。近年では都市の水需要を反映したダム建設も進められ、都市近郊へも立地をみるに至った（「人文地理」三十三巻の四号）。

ダムの端にある管理事務所を訪ねてみた。五〇年配の管理人の方から、ダム工事の当時の状況や山の気象観測等について話を聞いた。管理人の方は、椎葉村の出身でよく土地のことに詳しい。気象観測については、日々データは記録しているが、一か月ごとの集計や一年間の集計はやっていないという。「それでは、雨量だけでも台帳から集計してみましょう」と、私のために昭和五五年の一年間の椎葉村の雨量の集計をしてくれた（表10）。年間三、〇二六ミリの降水量で、かなり多いが、この年の異常気象の冷夏を考えると、平年よりは数百ミリは多いのではないかと推測される。

一般にこの地域は六月に雨量が最高に多くなっており、九州型の気候の特徴を示している。また、気温について、調査の時間が不足して集計ができなかったが、管理人の話によると、夏季はどちらかというと涼しいが、冬季はかなり底冷えがし、積雪も多いときは二〇センチぐらいはあるという。

湖水にはコイ・マス・フナ・ウナギなどがおり、釣り客が数人糸をたれているのを見かけた。また、付近の渓谷にはヤマメ釣りも楽しめるということである。

表10　上椎葉の年間の雨量（昭和55年）　　単位：mm

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全年
雨量	88	37	211	181	454	418	460	402	403	248	69	55	3,026

（資料…上椎葉ダム管理事務所）

参考文献

椎葉村「村勢要覧」　昭和五六年
椎葉村「出かせぎ実態調査報告」　昭和五六年
新山芳彦「椎葉の歴史物語」　昭和五五年
九州電力「上椎葉」

日高次吉「宮崎県の歴史」（山川出版）　昭和四五年
平部嶠南「日向地誌」（日向地誌刊行会）　昭和四年
下村新馬「五家荘・椎葉地域調査」「地理」の五巻六号（古今書院）　昭和三五年
宮崎県高等学校教育研究会地理部会編「みやざき新風土記」（鉱脈社）　昭和五五年
宵野・尾留川編「日本地誌」二一巻（宮崎県）（二宮書店）　昭和五〇年
下中邦彦編「風土記日本」（九州・沖縄編）（平凡社）　昭和三五年
西野寿章「ダム建設にともなう水没村落の移転形態と村落構造」人文地理三三巻の四号（人文地理学会）　昭和五六年
杉本尚次「西日本における民家間取型の地域性」地理学評論三四巻の五号　昭和三六年

（佐伯鶴岡高等学校教諭・[redacted]）

大分県地史料方叢書㈡

豊後国村明細帳（九）

肥後領大分郡高田手永「高田風土記」ほか
海部・国東・速見郡の村明細帳五篇収録
（会員二五〇〇円、会員外三〇〇〇円）

大分県地方史料叢書㈦

「縣治概略」（Ⅰ）
「県治概略」（Ⅱ）

大分県成立以来の布告達を集大成した
県草創期を知る基本史料
（会員各二五〇〇円、会員外各三〇〇〇円）